

第Ⅰ回 教育課程企画特別部会に寄せる意見

田村知子（大阪教育大学）

学習指導要領は「告示」される教育課程の「最低基準」であるため、「～する必要がある」など「規定」が基本でしょう。しかし、「規定」のベースとなるのは、子供達の学びを保障し、それを充実させようと工夫を重ねる教員への「支援」であるはずであり、それが感じられるものになることを願います。以下、自身の研究対象であるカリキュラム・マネジメントの観点から簡単に意見を述べます。

平成 29 年改訂学習指導要領に、「カリキュラム・マネジメント」という概念が初めて掲載されました。そのこと自体は、教育活動を実現するために有効なプロセスや必要な条件整備活動に目を向ける契機を提示したという点で大きな前進だったと評価しています。しかしながら、学校の管理職や教職員の皆様、教育委員会の方々と対話する中で、次に例示するような課題も見出しています。

1. カリキュラム・マネジメントの概念理解に難しさを感じている、わからない、という声。
2. 新しくやらなくてはならない負担が増えた、という捉え。
3. カリキュラム・マネジメントといえば、教科等横断的な授業づくり、という理解。
4. 一定の作業（例えば単元配列表を作成すること）の目的化や形骸化。
5. 「カリキュラム・マネジメント」のマジックワード化。 など。

1.2.について、

「カリキュラム・マネジメント」は、子どもたちの学びをより充実させるために、1時間の授業レベルにとどまらず、単元レベル、年間レベル、学校全体の教育課程レベルで、より長期的に、より幅広く総合的に教育活動を捉え、教職員が、学校内外の関係者とも連携しながら、力を合わせて、教育課程全体で子どもたちの資質・能力を育成する営みです。そう考えれば、「カリキュラム・マネジメント」という概念の使用の有無にかかわらず、従来より、多くの学校で多かれ少なかれ取り組んできたことが多く含まれます。そして、さらにどのような工夫をすればいいのだろうか、各学校の実態を踏まえて、関係者が知恵を出し合い実践して、それを振り返ってより良いものにするものなのだ、と肩の力を抜いてもらえるようなメッセージが学習指導要領から伝わるような工夫ができればと思います。

3.4.について、

研究で明らかにされてきた「カリキュラムマネジメント」のポイントは「つながり」です。ただしこれは、教科等横断的な教育内容の組織に留まらず、例えば目標と授業や単元とつながり、単元

間や学年を超えた系統性という意味でのつながり, 子どもの生活経験と学校の学びとのつながりといった幅広いつながりを見据えた議論です。教科等横断的な学びは大切ですが, 同時に, あるいはそれ以前に, 教科の本質に迫る深い学びを実現することなども視野に入れやすくなる表現ができるようにしたいと考えます(もちろん, 現在でも「主体的・対話的で深い学び」の実現の文脈で論じられています)。

また, 教科等横断的な教育活動を実施するために広く作成されるようになった単元配列表は, 「各教科等の全体を見渡して, より効果的な教育課程を編成したい」といった願いを持った学校の先生方の知恵と実践によって開発されたものです。その価値は高く有効に使えるものですが, 仮に「まず単元配列表ありき」という捉えをした場合, 手段の目的化が生じ, 実践が形骸化します。何をしたいのか, という目的が先にあってこそその手段・ツールだということを今一度, 確認したいものです。

5. について

様々な教育活動の推進において, カリキュラム・マネジメントを推進することが鍵であると論じられています。確かにそうではありますが, カリキュラム・マネジメントで全てを解決できるわけではありません。カリキュラム・マネジメントがブラックボックス化・マジックワード化しないよう, そして, 学校の実態に応じて, 多様なカリキュラム・マネジメントの態様があり得ることや, 学校で創意工夫をして弾力的に運用できるというメッセージが伝わるようにしたいと考えます。その際, 「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究(文部科学省委託研究, 令和元年度～2年度, 令和3年度～4年度)などの成果も参照することが考えられます。